

# DRAMA かながわ 62

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区富富町西通り52(横浜演劇研究所内) Tel.045-261-4866

## 神奈川芸術劇場オープニング 神奈川県演劇連盟公演への感慨

山本忠利 (元神奈川県演劇連盟事務局長)



2011年4月22日から5月8日の3週間、神奈川芸術劇場(KAAT)の中小スタジオと大ホールを使用して、神奈川県演劇連盟の3つの公演が開催された。

第1弾・「八月のシャハラザード」(脚本・高橋いさを〈劇団ショーマ〉／演出・緑慎一郎) 4月22日～24日・4回公演。

第2弾・「観よう! 遊ぼう! たのしもう! 『あそびば』」(全体構成・企画・演出・川井眞理子) 4月29日～5月1日・9集団公演+劇団かかし座手影絵パフォーマンス

第3弾・「黒船がやってきた」(作・演出・横田和弘) 5月7日～8日・3回公演。

私もこの公演に多少の関わりを持ちながら接してきたが、公演が無事に終了したことに、少なからずの感慨がある。

その一つは、神奈川芸術劇場の建設が悲願であったことだ。かつて紅葉ヶ丘地域再開発プランで総合芸術文化施設建設が発表された。やがてバブル経済破綻の影響を受けてプランは白紙になり、代わりにドーム劇場というにわか施設の建設で物議を醸した。そういう曲折を経ての今回の新芸術劇場建設である。

神奈川県演劇連盟は神奈川県文化プランが発表されるたびに、神奈川県演劇連盟としての要望書を提出し、実現して欲しい演劇専用ホール・中小ホール(スタジオ)のビジョン・練習場・資料室などの設置を要望し続けてきた。その積年の要望がついに実現したという実感と思いである。

もう一つは、今回の新芸術劇場で公演が、神奈川芸術文化財団との共同事業で出来たことだ。かつて(今でも基本的には変わっていないと思うが)神奈川県文化施策はプロ集団の対応とアマチュア集団の対応がかなりクッキリと分かれていた。神奈川県演劇連盟はこうした区分け行政に違和感を感じ、その垣根を引き下げ、出来ることなら同じステージで論議し企画し、演劇文化の振興について話合いたいという意向を持ち続けてきた。その願いが少し進んだという感慨は小さくない。

今回のKAAT公演は神奈川県演劇連盟の50周年記念事業でもある。10年前の40周年の時に初めての記念合同公演を実施した。神奈川芸術文化財団の演劇担当プロデューサーであった加藤直氏に演出を依頼した。加藤直氏は横浜演劇研究所の創始者であった加藤衛氏のご子息である因縁もあったが、加藤氏自身が地域演劇との共同作業もしていて、神奈川県演劇連盟にも理解を持っていた。そうした様々な関わりがあって、加藤氏は

40周年の合同公演の演出を引き受けてくれた。

加藤氏に演出を要請した演劇連盟は、もう一つ強く神奈川芸術文化財団と繋がりたいという思いがあった。結果は加藤氏の演出受託だけでなく、神奈川芸術文化財団の共催事業としての位置づけもされ、公演制作に当たって若干の支援もいただいた。

合同公演は加藤氏の指導のもと創作ワークショップを経て「西遊記」を舞台に乗せた。神奈川県演劇連盟の加盟劇団から合同公演参加者を募り、7劇団49名の参加を得た。

公演は横浜川崎2会場、2534名の観客を得て成功裏に終わった。しかし神奈川芸術文化財団との関係は壁を取り払うまでにはいかなかった。神奈川県文化政策の基本が変わらないところではやむを得ないのかもしれない。

それから10年の歳月が流れた。そして50周年の合同公演企画として新たな話が持ち上がり、今回の企画になった。ここに至る経過についてだが、まず演劇連盟理事長横田和弘の果たした役割を記しておく必要がある。横田は神奈川県文化課との接触を通して、新劇場建設とその柿落公演に神奈川県の演劇集団を結集する合同公演を立ち上げたいという話を受けた。横田は、一貫して希望してきたプロ・アマの垣根を超えて、神奈川芸術文化財団との共同事業を進めることが出来るかも知れないと思った。

しかし当初の案は、横内謙介氏を演出に招聘し、参加者は演劇連盟以外の演劇人を含む希望者を募って行う企画であった。その後予算の折り合いなどもあり横内謙介氏は降りた。こうして神奈川県演劇連盟に企画が一括委嘱されたわけだが、横田の中には、神奈川県演劇連盟こそが神奈川に地域演劇を代表する集団だという信念と、どんな条件下でも必要な努力はするという責任感から事業の要請を受託した。

横田和弘の根底にあるのは、「西遊記」公演の成果を受け継ぎ、プロ・アマの垣根を超えて芝居を創り合う環境をつくりたいという希望である。私もかつて同じ思いで横田と活動を共にした。何より「西遊記」公演の制作者として加藤直氏を招聘した時の責任者であったから、その後の神奈川芸術文化財団との関係がもっと太くなることを願ってきた。そして今回の公演はその端緒を開いたことになり、私にとっても重い感慨を生む所以である。

神奈川県演劇連盟はこの実績をしっかり受け止めて欲しいと思う。神奈川芸術文化財団と良好な関係を維持継続して行くことが出来れば、演劇連盟にとっても新しい可能性を生むことは確かであろう。しかし、実際にはそれぞれの集団の創造体制が手一杯で、全体のこととか組織的なことは面倒





であったり重荷であったりして、深い関わりを持とうとしないところがある。創造集団の連合体である演劇連盟は創造に直接関わることに以外に、創造環境を整えるための様々な非創造的な役割も果たさなければならないことも事実だ。しかし先人が切り開いた新しい創造環境の地平は、元に戻すのではなくしっかりと受け止めて引き継いで欲しいと思うのだ。

合同公演の結果は好評であった。3つの企画はそれぞれ神奈川の演劇運動を象徴する企画であった。

第1弾・「八月のシャハラザード」は神奈川県西相地区の劇団が合同して創造に関わり、その成果を持って横浜に出てきてK A A Tで公演した。広域の劇団が集まり芝居を創るだけでも大変だが、観客も含めて西相地区から呼ぼうという取組はなかなか出来ることではない。しかし神奈川県象徴的な新芸術劇場のオープニング企画に、神奈川県全体を視野に入れたこうした企画が持ち込まれたことは画期的であると同時に、神奈川県芸術劇場が県下の演劇状況に心配りをしているように思えて好感を持つ。

結果も、400名を超える観客にまみえることが出来、一定の舞台評価も受けた。



第2弾・「観よう！ 遊ぼう！ たのしもう！ 『あそびば』」は、子どもたちを観客対象にした企画であったが、同時に、2つの合同公演企画に参加しない集団の中から、ミニ企画として30分程のレポーターリーを持ち寄ってもらい、K A A Tの中スタジオという新しい劇場での発表の機会を得たことも、意味あることであった。9集団の公演はそれぞれほぼ満席の状況を生み、親子連れの観客との交流が出来た。

子どもの遊びの広場は「落書きと新聞紙のプール」用意され、最終日は劇団かかし座の影絵体験と影絵の道具づくりも体験できた。子どもたちは遊びのついでに小さなお芝居に触れることができて、初めての演劇体験をした。

これも、神奈川県芸術劇場が大人から子どもまでを対象にした企画を持つ

ことで、県民全体に目を向けた演劇的事業をしようとしているという、大きなメッセージを送ったことになる。観客の延べ人員は500名を超えた。

そして第3弾・「黒船がやってきた」合同公演である。今回の神奈川県演劇連盟の中心企画であるが、横内謙介企画から演劇連盟企画に移行し、横田和弘 作・演出は横田に負担をかけた。キャスト参加者は70名を超えた。横田は旧作ミュージカルに手を入れ、70余人の出演希望者全員を舞台に乗せた。70余名を必要とする作品ではなく、キャスト希望者が70名以上いて、全ての希望者を舞台に乗せる作品にするためにかなりの無理をした・・・というのが正直な感想である。

これは作品を創ると言うよりは、イベントとしての舞台を構成するという作業であった・・・のではないかと私は思う。

観客は2000名にあと少しだった。70余人の参加者ががんばった結果であるが、合同公演としては最小限のラインは超えた。アンケートも15%の回収でまずまずであった。アンケートの記載は好評であった。作品の評価は結局一人一人の観客の受け止め方だが、一観客としての私の評価もあるが、私の受け止め方では「イベント」という要素が強くて、細かいことはまあ良いかという程のものである。イベント参加者がみんな喜んでくれたのだから、その限りでは良かったのではないかと思っている。

通常の劇団活動の結果としての舞台評価とは違い、気になること、不満や可能性を書いてもあまり意味がないように思う。そんなことより、70余名のキャストにスタッフ・協力者を加えれば100名を超える取組として、大過なく舞台を迎えたこと、一応満足のいく観客を集めたこと、神奈川県芸術文化財団との協力関係が維持される実績を残したことなど、全体としてお互いが納得できる形を作れたことが、最大の成果であったと括って良いのではないと思う。

前半に書いたが、10年前から今日に至る神奈川県演劇連盟の神奈川県演劇界に置ける存在の仕方が、神奈川県芸術文化財団及び神奈川県芸術劇場と共に歩む第1歩を築いたとすれば、それこそが何にも勝る成果であり誇りであろうと思う。

ただ今後は、イベント的な舞台成果で満足することは許されないのではないかと考える。神奈川県芸術劇場の諸公演に伍して、創造的レベルも遜色のない成果を生みだしていくこと、70余人もの出演者がいなくても一定の集客力があるような演劇連盟に育つことが求められていると思うのだ。そういう盤石な基盤が出来た時にこそ、本物の感慨に胸が膨らむことだろう。

## 湘南・西相地区合同公演 「八月のシャハラザード」観劇記 劇団蒼い群 村田次郎

お疲れ様でした。2回目の昼公演を見させて頂きました。率直な感想を述べさせてもらいますと、1回目の公演の反省点はなかったのかなという気がしてなりません。お芝居は観客にとって一度きりの体験で終わってしまうことが、ほとんどの観客にとって言えば、作り手側にとっても自分たちの主張が1回だけ試される機会となる。その1回にかける、一度にかける良さがお芝居にはある。

ということで2回目は果たして1回目よりも自分達の主張（平たく言えばまとまり）が観客に通じたのだろうか、反省のないまま2回目の幕があがってしまったように観ていながら感じてしまいました。

役者同士の真剣なぶつかり合いがおざなりになり、笑いを取るためのコミカルな要素に捉われすぎているのがこのお芝居の質をさげしてしまっているように思える、私という観客が感動できないのもこの一点につきる。

作品への共通理解をもっと話し合い、ほりさげ、作品のもつ良さをもっと前面に出せるようにしてもらいたかったと感じた。お芝居を観ていない多くの「ドラマ神奈川」の劇評欄を今読んでる読者には、何のことやらわからず、実に不親切で身勝手な劇評であり申し訳なく思っています。

しかし、自省も含め、今後もどンドン頑張っている筈のメンバーにあえて苦言を呈しつつもエールを送りたい、「結果を急ぐな」と。



湘南・西相地区合同公演 八月のシャハラザード  
2011年4月22日(金)～24日(日) 神奈川県芸術劇場 中スタジオ





入口のNHKの巨大キャラクターD君がKAA Tのイベント看板の前に立ちただけどっちが大家なのか・・・？と少々不満顔で1フロビーでキョロキョロ。「あそびばは2Fですよ、エスカレーターでどうぞ。」とKAA Tのスタッフが親切に声をかけてくれなかったら迷子になりそうな位奥まったところに辿り着いたあそびば。ダンボールに囲まれて無心に絵

を描く子ども、くしゃくしゃの新聞紙をかきわけてお宝さがしに興じる子ども。1フロビーのタダで等身大の着ぐるみキャラクターと遊べる楽しいあそびばにではなく1000円払ってここに来てくれた親子連れに敬意と感謝を表明したい気分です。「いろいろ舞台」が始まる頃は満席。身をよじって転げ回って楽しむかぶりつきの子どもの笑顔が印象的でした。

パークッション、河童座、京浜協同劇団、横綱チュチュを観劇。多才なテクニックの4人のパフォーマンスはプロならではのサービス。河童座はシンプルなステージに大きなアクションで子どもを飽きさせず、京浜協同劇団のバナナのたたき売りに始まって、腹話術（個人的に私のお気に入りゴローちゃん）“ごんべえ太鼓”（パントマイムと心地よい太鼓の響き）と京浜ならではの充実した舞台。女性パワー全開の“横綱チュチュ”。早替、早台詞はお見事!!でも何で「横綱」?「チュチュ」ってなあに?熟女らしからぬネーミングいつも気にかかっています。

～観よう!遊ぼう!たのしもう!～ あそびば  
2011年4月29日(祝・金)～5月1日(日) 神奈川芸術劇場 中スタジオ

## ・・・観劇あれこれ

### 団のぼる

#### 合同公演が生み出したもの

神奈川県演劇連盟の合同公演「黒船がやってきた」が神奈川芸術劇場「KAA T」の柿落として一躍を担えたのはうれしかぎりだ。序盤は中スタジオの舞台上で連盟西相地区の若々しい合同公演「八月のシャハラザード」。続いて中スタジオに子どもと大人で楽しめる工夫を凝らした「あそびば」企画。ここでも九つの集団がしゃれていて温かな舞台を繰り出し観客と楽しむ空間を創りだしていた。舞台上演の成功は舞台の魅力とそこにたくさんの人を集める力が必要だ。「黒船がやってきた」は集客の面でもにぎわいを見せていた。

#### 東日本大震災がもたらした影響

「黒船がやってきた」の劇評依頼のはがきが舞い込んだ。劇評などに性に向かないので重たい気持ちになるが、新しい劇場と連盟の合同公演だから今回は心を決めて足を運ぶことにした。折しも3月11日の東日本大震災そして未曾有の原発事故。聞けば合同公演を目の前にした参加者も、この時期に演劇をやっているのだろうか、上演を中止しようか、という議論がされしばらくは稽古が中断したと聞く。一連の出来事は正に演劇の力も試されているのかもしれない。

#### 新しい劇場に一步踏み入れて

作・演出の横田和弘氏(神奈川県演劇連盟理事長・劇団河童座代表)はこの作品を横須賀市や県青少年センターですでに上演を試みているが、今回の震災を考慮し手直しに苦勞をした様だ。出演者は連盟の参加者と一般公募による70名を超す大所帯。スタッフも含めると劇場の大きさには負けないスケールだ。連盟では昨年の12月に若者が中心になって合同公演を終えたばかりなのに、改めて演劇人の力はすごいと思う。

建物に入ると一回のロビーでは結婚式の披露宴だろうか賑やかな歓声が響く。ホール向かって階段を上ると劇場の受付嬢と連盟の受付担当が明るく出迎える。私は中ほどの上手寄りに座る。真新しい赤いシート。1階のスロープは程良くどこの席からでも舞台を見渡せ、2階、3階、4階の両

端は舞台の袖近くまである。

客入れの舞台は緞帳を飛ばし、様式化された立体が組み立てられてどこでも舞台の様。天井から何枚もの布のような仕切りが吊るされて照明が高さと立体的な奥行を感じさせている。初めてのホールだけに緞帳が見られなかったのは残念だが次の機会の楽しみにしよう。

#### 白いサルとの出会い

物語の始まりはスモークがたかかれ波の音が高まり照明が落ちるとストーリーテラーが客席下手より現れる。舞台は浜辺を散歩する現代の母と少女(ナミ)のシーン。浜に遊ぶ少女は貝殻を耳に当てる。貝殻に鳴る風が少女を150年前の日本、黒船がやってきた頃の開国に揺れている浦賀港にタイムスリップをさせる。そこで母の形見の鏡を探し回っている白いサル(チャル)と出会う。(余談だがその猿島は今でも横須賀市の海に東京湾唯一の自然島として存在している。)

#### 過去の歴史に紛れ込んだ少女が見たものは

150年前の舞台は度重なる黒船の到来を楽しみに、庶民は戦わぬ限り安心であると数え唄にまでしている。落ち着かぬお役人は庶民を権力で抑え込もうとする。一方では新しい国を切り開こうと若い侍たちも自由を求めるが刀に物いわせ幕府と戦いを起こしている。混沌とした過去の日本国に飛び込んでしまった少女は、殺し合い傷つけあいののしり合う渦中に遭遇しながら、改めて人の命の尊さを感じるようになる。過去の歴史を学んでいる少女が現代から紛れ込むのであるから穏やかではない。しかし賢い少女は、そんな時代に紛れ込んでも、人間の戦いは、結局人の命を無駄にする殺し合いでその先は何も開けない、ただ不幸を生むと思えるようになる。

#### 少女らが黒船との戦いを避けるためにしたこと

時々メルヘンタッチに場面が変わるのがこの舞台の自由さか。嘘でも出来そうもないことでも当たり前前に舞台展開が起きる。自然界のホラ貝の王様が出現して人間の身勝手さに嘆く。やがて少女とチャルは港の娘(お良)と



仲良しになる、黒船の大砲の音が鳴り響き事態は緊迫している。三人が企てたのは江戸の幕府に聞いた増援を頼む最後通牒の密書を「黒船は友好的で戦いの素振りはないから平和にうんぬん・・・」とたしなめた密書と入れ替え戦いを止めようとするが、争いに巻き込まれたチャルは幕府の役人の鉄砲の流れ弾に当たり命を落としてしまう。死んだチャルを胸に抱き少女は「国と国とがなぜ戦うのか、なぜ刀で解決するのか。子供の喧嘩は他人に迷惑をかけない！大人は自分が正しいと思っているから戦争になる、仕方がない仕方がないと言って誰かを犠牲にしている、チャルを帰せ！」と泣き叫ぶ。「夢に向かって生きてきた人を奪うな、弱い人を犠牲にして戦争はなくならない、人は弱くて優しい、それが人間」。少女の怒りはそれなりに胸を刺すのだが。

チャルは母親の形見の鏡に守られて生きていた。やがて別れの時がやって来る。港の娘は今の浦賀は明るくて楽しい村で仲間もいる。それに母さんも父さんもいる。私はこの時代に残る。少女は貝殻を耳にあて元の浜辺に戻ると母親はまだ優しい日差しの中で居眠りをしていた。その短い時空の中で少女はたくさんのことを体験し母親に、生きること戦争のこと人間の素晴らしさを嬉々として話して聞かせるのである。

### しゃべりすぎると観客はテーマから離れていく

さて気になるのは、チャルの死をきっかけに少女に語らせる（命の大切さについて）台詞はがぜん多くなる。またチャルも話す。さらに浜に戻って少女は母親に。それは少女の成長を思わせたいのだろうが、せつかく観客の心に膨らんできた思いを、舞台からこれでもかと説明されると心が離れてしまう。作者が伝えたいことがこれではまだ足りないという思いが強いのだろうか。大切なメッセージは、役者の心を観客にゆだねて言葉に頼らないほうがいい。ドラマの中で役が生きていれば必ず観客に通じると信じてほしかった。心が通じるようなドラマの展開があればいいのだから。

### 群衆の扱いと歌や踊りの大切な役割

大勢の俳優がコロスの様に入れ替わり侍になったり庶民になったり、歌ったり踊ったり出たり入ったり舞台転換はテンポもあって心地よいが、これは舞台の時代背景を創り出す場面。物足りないのはリアリティの不足だろう。特に権力の描き方の弱さは舞台をうそくさく見せてしまう。

### 舞台装置、音響、効果の楽しみを

舞台装置は最後まで変えなかったのはなぜだろう。客入れの時のイメージと様式化された舞台は出入りのテンポを生かすことは出来たのだが、どこかで吊りもののパネルが回転をするとか飛ばすとかもう一つ挑戦してほしかった。スモークの使い方も場面や時間等工夫がないと効果より邪魔になってしまうのが残念だ。大きな劇場はマイクをふんだんに使うのだが、これには熟練した配慮が必要になるので使いかたによって紛らわしい音になる。マイクを使っても声は役者の声であってほしい。

### 合同公演の宝物は

合同公演を完成させるには大変なこと。創造的な問題ばかりではない。大所帯だけに広い稽古場の確保も大変な仕事。集客についてはどうしたら一人でも多くの方に劇場へ足を運んで貰えるか、ただ芝居が好き、役者がやりたい、だけではとてもまとまらない難事業である。参加者全員の「私たちの舞台を観てほしい」という強い思いが、どれほど人を動かし感動を生み出せるかが大きなカギ。この合同公演は大切な意味合いを含んでいる。心に残る宝物は幕を下ろした後に待っていると思う。



神奈川県演劇連盟合同公演 黒船がやってきた  
2011年5月7日(土)・8日(日) 神奈川芸術劇場 ホール

## 総会について

2011年度総会が5月22日にラゾーナ川崎プラザソルにおいて開催された。午後2時、藤井副理事長の開会のことばで総会は開始。(財)川崎市文化財団・ラゾーナ川崎プラザソル館長の三井保夫様とライトトラップの蔵重様のご挨拶があった後、総会議長と書記を選出し、議事に入った。

2010年度活動報告では、横田理事長のはじめの言葉の後、①神奈川県演劇フェスティバル(勝碕氏)、②第8回神奈川演劇博覧会(織田氏)、③DRAMAかながわ(安次嶺氏)、④12月合同公演(眞野氏)、⑤2010年度横濱世界演劇祭(団氏)、⑥2010年度要望活動(馬場氏)、⑦芝居塾(眞野氏)、⑧演劇資料室、⑨2010年演劇連盟の活動(馬場氏)、⑩会計報告(織田氏)並びに会計監査の各報告が行われた。



## 劇団川崎演劇塾 村田好行

2010年度の活動の中でも、50周年記念合同公演とKAA Tの合同公演という2つの大きなイベントが重なったこと、3月の震災の影響で演劇博覧会が中止となったことが特徴的であろう。質疑・討論では、赤字決算となった50周年記念合同公演への補填を含めた会計報告について質疑が行われ、理事の中で十分討議した上で、次回理事会にて予算書、決算書の承認を得ることとなった。

2011年度活動方針では、①神奈川県演劇フェスティバル(勝碕氏)、②第9回神奈川演劇博覧会(緑氏)、③DRAMAかながわ(横田氏)、④横濱世界演劇祭(団氏)、⑤2011年要望活動(馬場氏)、⑥芝居塾(眞野氏)、⑦KAA Tに関連して共同作業(横田氏)、⑧演劇資料室(金谷氏)、⑨2011年度県演連合同公演(藤井氏)、⑩財政方針(織田氏)についてそれぞれ方針説明があり、会計監査担当として風雲かばちの馬車(留任)と演劇プロデュース『螺旋階段』(新任)を選任した。質疑・討論の中で、ひこばえの村上氏より、今回の総会を最後に退会することになった経緯と謝辞が述べられた。

以上の議案(予算・決算は除く)について代議員の拍手を持って承認を確認し総会は終了した。その後、同じ会場内で懇親会が行われ、加盟劇団相互の親睦が図られた。



# 神奈川芸術劇場×神奈川県演劇連盟

『これは“はじまり”の“はじまり”』

神奈川県演劇連盟として神奈川芸術劇場の柿落とし公演の一つとして三週間にわたって公演を行うことが出来た。これはK A A Tと連盟のはじまりである。これからの神奈川芸術劇場と神奈川県演劇連盟について真野館長と横田理事長による会談をしていただきました。

**真野** 本当にありがとうございます。芸術劇場の開幕シリーズの中で県演連とともに一緒に仕事が出来たことはとても意義深いこと。これは終わりではなくて、はじまりのはじまりである。むしろこれからどういった形で継続していくのか、そのことで知恵を頂きたい。

**横田** 神奈川県演劇連盟はK A A Tにとってはイレギュラーな集団であると思う。それを受け入れて、県演連が公演させてもらったことに本当に感謝をしたい。

**真野** 本当に稽古期間の短中、よくまとめてくれたという印象を我々は持つことが出来た。これからも県演連との関係をどのようにしていこうかと、考えている。県演連の作品を毎年もしくは隔年、一番いい形を模索している。

**横田** 先ほど稽古期間の話が出たが東日本大震災の影響は本当に大きかったです。

**真野** 地震の後、どこも稽古場所を貸さなくなった。もちろん節電等可能な限り協力はするが、貸さないとすると芝居には大きな影響が出る。

**横田** 今年の夏も影響が出るんですね。

**真野** 15%~25%の節電が予想されている。まずマチネは出来ないのではないかと予想している。今年だけで済むとも思えない。これは大きな問題だと考えている。

**横田** そうなんですか(絶句)

**真野** 今度の公演で神奈川芸術劇場が何をしなければいけないのかという、一つの要素がはっきり見えてきたし、県演連にとっても神奈川芸術劇場がどういった意味を持っているのかははっきりわかっていただけたと思う。我々が県演連の仕事を引き受けて本当に感じたのは、神奈川には本当に劇団が多く活動していること。また、多くの演劇人がいるということ。あ、神奈川はとても演劇に対して豊かな厚みのある土壌なんだと改めて感じた。

そして、今あるこの土壌を神奈川芸術劇場が上手く行き先を一緒に考えていかなければならないと感じた。どこまで出来るかはわからない、いろいろな試行錯誤があると思う。しかし、そういう活動の中でプロフェッショナルな集団が出来上がっていくことを望んでいる。

**横田** 本当にいろいろな集団があるので、そういうことを考えている集団もいる。私は、数年前から県演連は、プロとかアマとかの壁を取り払おうと考えています。もっと広く、勿論プロもアマもなく、スタッフ集団や観る側も参加できるような連盟にと考えています。事実、大分変わりつつあると思います。

正直、神奈川の演劇は盛んだと思います。ただ、各劇団のすべて力があるわけではない。

若い集団をどれだけ救うことが出来るか、大きな問題だと考えている。そういった意味では、新しい集団や個人にめぐり合えた「黒船がやってきた」



は意味深い。そのような場を与えてくれたK A A Tには感謝しているし、今後もこのような企画を、神奈川芸術劇場には期待している。

**真野** 今回、三週間にわたり県演連がやっていただいたことは、ほとんど我々が四ヶ月やってきたことと同じだと思っている。大きなホールでは大人数が空間を上手く使い公演を行い、小さなスタジオではテーマを絞り公演を行う。そういった意味でも同じ方向を向いていると感じた。

**横田** 神奈川県演劇連盟としては今後も神奈川芸術劇場とは来年以降も企画が続くことを信じています。これが合言葉に近かったかもしれません。

**真野** ははは(笑) だけど、大変だっただろう。

**横田** はい。ホールは大変でした。今後は大スタジオを使わせていただけたらと。

**真野** ホールは3年に一度とか4年に一度とかがいいのかな。

**横田** はは、そうですね。

**真野** だけど、本当に神奈川という広域な中でどうしても横浜が中心になってしまう。そんな中で神奈川県全域から集まっている県演連と組んで行えたことは良かった。演劇に決まった形はない、あれも演劇これも演劇。今度、県演連がK A A Tで行う公演はまた違う形になるであろう。

**横田** おそらく県演連がK A A Tに招いた3000人のお客はいつもK A A Tを利用している客とは違うと思ったのですが、

**真野** そう思う。普段K A A Tに足を運んでいないお客を運んでくれた。このことは大きな成功といえると思う。来年以降も出来るだけ楽しくていい企画を続けていこうと考えています。

**横田** 宜しくお願いします。是非、今度はスタジオで。



# 青少年のための芝居塾がはじまる



神奈川県立青少年センターで行われる青少年のための芝居塾。

神奈川県演劇連盟の担当劇団と一緒に青少年がひとつの芝居を創作して、演劇の喜びや辛さを体験できる最も演劇を身近に感じさせる事業である。

年々、参加者は増え続け今年は22名という応募があった。高校生のための芝居塾から数え三年連続で担当する風雲かぼちゃの馬車、演出・土井宏晃に取材をし、青少年のための芝居塾に掛ける想いを伺ってきた。

—— 一昨年は「夏の夜の夢」、去年は「ロミオとジュリエット」でしたが、今年の作品は決まりましたか。

**土井** はい、シェイクスピアの「冬物語」を劇作家が書き直して公演することにしました。

今回は本当に出演者が多くて劇団員も入れるとキャストだけで三十人を超えています。ダブルキャスト等も検討しましたが、出来れば全員でひとつの舞台をと考えていろいろと探した結果「冬物語」になりました。

——シェイクスピアが続いてますが思い入れがあるのですか。

**土井** 特にシェイクスピアという思いがあるわけではないのですが、古典演劇の魅力はとても強く感じています。昔も今も不変的な恋愛であったり親子愛であったり、いつの時代も思っていることは同じで、それがよく描かれているシェイクスピアを選んでいるのだと思います。

——青少年と一緒に芝居を創るのですが演出面での変更点はあるのですか。

**土井** はい、時代と場所を変更します。都会的な場所とカウボーイが出るような場所とを行き来するような話になります。年代は60年代に設定し

多くの役者が出演できる形にしました。

——稽古場の雰囲気がとても楽しそうでもあり、苦しそうでもありましたが。

**土井** ハハハ、そうですね。苦しいかもしれませんが。汗をいっぱい流す稽古にはなりますから。でも稽古場の雰囲気はとてもいいですね。今年で三年連続芝居塾は引き受けさせていただいているのですが、毎年参加してくれている子とかいます。

そういう子が新しく参加した子に雰囲気だとか稽古のわからないところとかを教えてくれている。そのことが稽古場の雰囲気を盛り上げてくれている要因なのかもしれませんね

——青少年のための芝居塾に対してどう考えていますか。

**土井** 今後も是非続けていただきたい企画だと思っています。神奈川県演劇連盟とこれから演劇を始めたいと考えている様々な人たちとの繋がりを作る大きな架け橋となっている企画だと思っています。また、芝居塾参加者が連盟の色々な芝居を観に行っていることを聞きました。そういう意味でも芝居塾はいい企画だと思っています。でも、少し苦しいところもありますけどね(笑)

## 取材日誌 劇団よこはま喜座 海老名信吾

6月某日、日差しも熱くなり始めた初夏に我々ドラマ神奈川取材陣は神奈川県立青少年センターの前に立っていた。何故か？それは「青少年のための芝居塾」の稽古を取材する為である。

これはドラマ神奈川だからこそ実現可能となった「青少年のための芝居塾」と、今を輝く神奈川の新星演出家「土井宏晃」への独占取材記事である。

我々はこの日、芝居塾の稽古が青少年センターの多目的プラザにて行われるという情報を逸早くキャッチし現場へ急行した。多目的プラザと言えば芝居塾の本番を行う会場である。(本番の会場を稽古で使うことが出来るというのは何とも贅沢な話である)胸を躍らせ我々は階段を昇っていくと、飛び込んできたのは大きな奇声 歓声であった。それもかなりの人数の声。恐る恐る入口のドアを開けると大勢の人間が熱気の中、ダンスを踊っていた。スピード感溢れる振付に皆一様に汗をかいており苦しそうな情景だが、出演者達が見せる真剣な背中と軽快なステップが不思議と「楽しんでいる」ということを伝えていた。そしてその姿を前から厳しい眼差しで見つめる…はずの演出家が居ない!?我々の脳裏に「取材中止」の4文字がよぎった。その時、声が響いた!!その声は出演者達が踊る群衆の先頭。自らも一緒に踊り、出演者達と同じ目線で物事を把握する。そうだ、これが土井宏晃だ。その後、出演者達の元気な挨拶と笑顔、我々が感じた「楽しんでいる」という雰囲気は間違っていないと確信した。挨拶も程々にまた次のダンスへ!!先ほどよりも早いテンポで常に動き続ける土井と出演者達。まだ完全に覚えてられていないステップを「風雲かぼちゃの馬車」のメンバーが率先し引っ張っていく姿が、和気藹々とした雰囲気の中にも真剣さを加えてくれている。

ダンスシーンが終わると舞台上での役者の動線確認が始まった。次々と居何処を変える出演者達。出番のない出演者が舞台奥で控えることは当たり前前の光景だが、皆が台本に演出から溢れ出るイメージをメモすることで、土井の頭の中のイメージが出演者達と共有され具現化されていく。私は取材を忘れ純粋に観客になっていた。統制がとれた中で楽しむことを前提とする稽古場は心地よく、観る者を惹き付ける魅力がある。取材という名を借り、この雰囲気を味わいたただけだったのかもしれない。いや、純粋に土井という男に会いたかっただけなのかも。

多目的プラザは大きな柱とフラットで自由な空間が魅力で、この空間をどの様に使うかが演出家の楽しみであると共に、観客にとっても常に新しい空間を提供してくれるという意味を持つ。そんな空間で「楽しみながら」「真剣に」芝居をする姿は我々にとっても楽しみ以外にない。今回の演目はシェイクスピアの「冬物語」を「かぼちゃの馬車」の座付き作家 重信臣聡が脚色する。「考えるよりも感じる演劇を」土井の言葉通り、様々なイメージ、色々な想いを感ずることが出来る演劇となるだろう。

第2回 青少年のための芝居塾+風雲かぼちゃの馬車  
デトロイトウインターテキサスサマー ~シェイクスピア「冬物語」より~

演出：土井宏晃 脚色：重信臣聡

日程：8月19日(金)~21日(日)

会場：神奈川県立青少年センター2F 多目的プラザ (JR桜木町駅より徒歩10分)  
お問合せ MAIL : fuun1223@yahoo.co.jp TEL : 080-3406-4910



# 僕らの演劇

## まりこ☆ミュージアム

### 本読み会「桃」第4回朗読公演

2月5日 於：横浜みなと町ギャラリー

**関** 内駅前すぐのビル地下1階にある会場は小さく20人も入れれば一杯というかんじのギャラリーで、壁には主催者であるまりこさんの絵が多数飾られていた。多才で羨ましい限りである。

30分前に着いたのだが、すぐ一人一人にお茶とお菓子が出された。飲み食いしながら朗読を聞くことができるようだ。

まりこみゅーじあむの朗読会に来たのは初めてだが、今回はまりこさんの指導している朗読の会のメンバー5名との朗読会だった。

おりんで始まった最初の演目は全員で読む詩、それからブリッジにおりんを使いながら1人ずつ短編を読んでいった。効果音に笛あり太鼓ありトライアングルあり、といってもみなおもちやのような可愛い楽器だった。こういう使い方もなかなか良い。朗読は一人一人のものにせず、全体で一つの流れを作ろうとしていた。全体で「風の死角」。其々の題も作者も告げられず、プログラムにも題名のみ、しかし作者名も入れてほしい。繋げているのはいいのだが、まとめて一時間以上の長いお話になる感じで、少々疲れた。

休憩にはいったらまた茶菓子の御接待があった。今までこういう喫茶店のような朗読会というのには出たことがなかった。音さえ立てなければこのリラックスムードはいいのかもしれない。自分でも朗読をやっている、サロン

みたいな会を開いてみたいとも思っていた。だが現実にはこういう場で、作品にもよるのだが、朗読の間ずっと飲み食いされるのは気に障るものだ。

後半は主催者まりこさんの40分位の朗読で、これもおりんと共に読み始めた。宮部みゆきの作品はストーリーがきちんとしているためか長い割には聞きやすかった。途中、御香(?)の香りがして驚いた。後で聞いたところによると効果香(?)とのこと。こういう使い方もありだとは思いますが焦げくさいような気もした。地下の狭いところでこういう匂いがすると火事が心配になるのは私だけだろうか？

ちょっと疲れたが楽しい時間を過ごさせていただきました。

劇団きさく座：佐々木登志子

## 横浜小劇場

### 「貧乏物語」 作：井上ひさし 演出：飯田克衛

5月21日～22日 於：関内ホール 小ホール

**大** 正期に大ベストセラーとなった「貧乏物語」著者で、日本のマルクス主義経済学の開拓者といわれた河上肇はマルクス主義者の大看板と目され、治安維持法により検挙・投獄されている。留守を守る家族の姿を悲しみの内に描いた作品である(ウェブサイトより。一部改変)。

この作品は、確かテレビでの劇場中継で観たことがある。留守を守る家族や、そこに訪れる女性たちがいづれも個性的な人物で描かれ、とても面白い作品だったと記憶している。

外部からキャストを集めて行うプロデュース公演とは違って、単体のアマチュア劇団内でキャストをまかなおうとする難しさがあるのだろうか。

劇団川崎演劇塾も団員数が減って、特に男優が少ないのでいつも作品選びに苦労しており、同じアマチュア劇団としてその難しさは分かるように思う。河上肇の留守を守る妻は穏やかさの中にも当時の帝国大学教授の妻としての威厳のようなものもあって良かったか。

治安維持にあたる内務省の高官の妻にはやはりプライドとか、それなりの雰囲気をもっとあっても良かったか。

昭和初期の時代の20代の女性が特高警察から辱めの拷問を受けたことを告白するつらさや恥づかしさは大変なものだと思うが、その表現としてはどうだったのだろう。

新劇女優は住み込みのカフェで働く貧しさの中にもっとプロの女優として人を惹きつける何かがあっても良かったか。

舞台の広さももう少し大きくして、全体にもっと動きがあっても良かったのではなかろうか。

以上、率直に感じた感想を羅列するだけで、まともな劇評となっていないことをお詫びいたします。



劇団川崎演劇塾：村田好行

## 劇団麦の会

### 「夏への扉」 作：谷藤太 演出：劇団麦の会

6月11日～12日 於：関内ホール 小ホール

**無** 数に散らばる星たちの中に、ひとときわ輝く星がある。今神奈川演劇界でひとときわ光り輝く劇団麦の会の公演『夏への扉』を観劇すべく、6月12日関内ホールへと足を運んだ。

物語はどこの街にもあるような小粋な喫茶店から始まる。未来への希望を失った少女明日香は、謎多きセールスマンから不思議な香を買ひ、夢うつつに過去へとタイムスリップしてしまう。折しも世の中はビートルズ来日に熱狂し、新しい時代の息吹を歓迎するエネルギーで溢れていた1966年。そこで明日香は若かりし頃の母と将来に希望を抱くおじと出会い温かく迎えられる。希望に満ちた雰囲気の中で明日香もまた希望を取り戻す。しかし、彼女の現実には1990年。ボーイフレンドとおじの説得を受けて、初めて現実と向き合うことになる。

ジョン・レノンが凶弾に斃れて三十年、世の中は彼の思い描く世界に近づいたのだろうか。明日香が抱える将来への絶望や孤独は、現代人が誰しも抱える心の隙間なのではないだろうか。随所に散りばめられたジョーク、洗練された大小道具や衣装、軽快なテンポとキャスト陣の魅力的な演技が絶妙に絡み合い、自然と私を舞台の世界へと引き込み、説得力を持って心に問いかけた。人のこころに届くものがあるとするならば、物質でも偽りでもなく、おそらくこころしかない。緻密な計算に裏付けされた制作側の構成と、出演者一人一人の役に対するあく



なき探究、彼らの芝居にかける偽りなき情熱こそが、私を舞台の世界へと引き込んだのだろう。

かくして明日香は現代へ戻る選択をした。そして現代に生きる我々も救われるのである。

とかく重いテーマになりがちな、現代人の心に巣食う問題に鋭くメスを入れながらも、芝居本来の楽しさを損なうことなく、且つさわやかな気分させる今回の芝居作りに、敬意と賞賛の拍手を惜しみなく送りたい。

ビートルズのナンバーが静かに劇場を包んだ。ジョンは唄う「よりよい人生を送るため、愛する人にここにいてほしい。」と。劇団麦の会『夏への扉』ここで人をつなぐ魂の劇。

劇団河童座：小澤明充

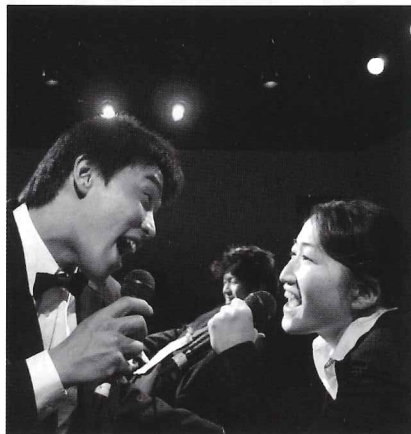


## 風雲かぼちゃの馬車

「熱海殺人事件」 作:つかこうへい 演出:土井宏晃  
4月7日～10日 於:STスポット

**激**しく鳴り響くクラシックの中暗転した劇場に明かりが点る。その瞬間なにかもを浚われた。気がついたら声を出して笑っていて、後はもうその圧倒的な言葉と動きの奔流に身を任せているだけで息つく間もなく押し流され海までいける程。

こんなとんでもないつかこうへいは始めて見ました(笑)乱舞するハリセン!まさかの歌アリ!殺陣アリ!踊りアリ!しかしその煩雑と聞こえる程多彩な言葉の一つ一つには強い力が有り、やはりつかこうへいなのです。きちんと重く、ちゃんと深い。とにかく面白い!文句なしに面白い!私が見たのは「チーム全力」だったのですが、その名の通り本当に全力!何もかも戯事のように何一つ無駄の無い、飛び交う台詞と劇場の中を所狭しと動き回る役者達の躍動。見ている方も全力で笑い、全力で泣きました。



今回はチーム戦を敷いて、4種類の『熱海殺人事件』があり、最後にアンケートの結果から選ばれた最強の役者達で上演される「最強チーム」版がありました。この「チーム全力」にはそれら全てを見たい!と切実に思わせるだけのパワーがありました。コンプリートした人が羨ましいです。

熱海殺人事件。その真相を目撃した時、すんと涙が落ちました。全力で振り回され激しく上下し、或いは疲弊しそうな心に、強い炎が小さく灯ったような思いがしました。沢山の台詞の中に隠された芯の通ったストーリーとそれを浮かび上がらせる演技力が結実することで現れた真実と結末には、本当に強いちからがありました。

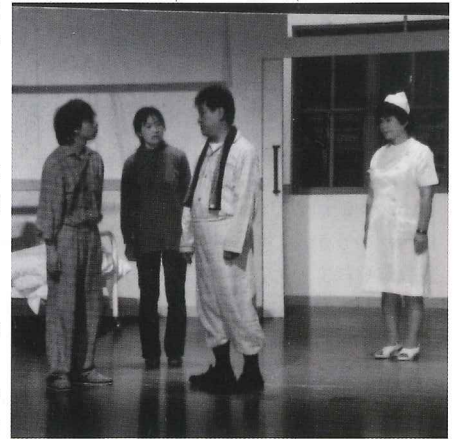
きっと風雲かぼちゃの馬車さんだからできるつかこうへいであり『熱海殺人事件』だったのだ、とおもいます。素晴しかったです。劇団相互の親睦が図られた。

劇団やぶさか: 清水真理香

## 劇団かに座

「あした天気になあれ」作:ふたくちつよし 演出:田辺晴通  
6月17日～19日 於:かなっくホール

**幕**が開いた瞬間、病室が舞台なことで気持ちに構えるところがありましたが、患者の軽妙なやりとりですぐに心がほぐれました。入院中の男性たちは年齢も仕事も家庭環境も様々ですが、四人部屋という個室にいわれていることで時間を共有しています。そこで生まれる暗黙の了解的な社会生活から切り離された妙な一体感は、家族でも友人でもない不思議な仲間意識を育んでいたのではないのでしょうか。



それぞれ、妻や母や職場の部下が会いにやって来ます。会話は聞き耳をたてずとも聞こえてしまう状況でお互いの日常を知ること。男同士のさりげない気の遣いあいに対して、女性陣、妻や母、看護師(婦)の、あけすけな物言いに共感し思わず笑ってしまいました。三十代後半に突入した私にとって、黙っていることよりもずいずいと思ったことは口に出していくそのパワーは尊敬に値する!飾らない日常の一端に感動を覚える年齢になってきたか・・・と若干心中複雑なまま、芝居はクライマックスへ。一人、ベッドを囲むカーテンを引くことで壁を作り、耳栓をしてまで他者との関わりを避け、頑なに社会人としての自分を守ろうとしていた男性のもとへ、部下がやって来ます。

信頼していた部下の昇進と自分の左遷に、抑えきれぬ感情があらわになります。閉ざしたカーテンの向こうから聞こえる嗚咽になんとも胸が締め付けられる気持ちになりました。願わくばそんな状況になりたくないし、立ち会うのも怖い。カーテンを開けてくれた妻がいて良かったね、一人じゃなくて良かったね、と心から思いました。私だったらあのカーテンを開けられたらどうか?開けられる人になれるのだろうか、と自問しつつ会場をあとにしました。家族という関係の底力をみた有意義な二時間でした。

G/9-Project: 恩田千鶴

## 編集後記

文化は多様化し多くの情報が溢れる中、演劇を取り巻く環境は良い方向に向かっていますとは言いがたいとおもわれます。さらに会場に足を運び観劇していても、閉鎖的な空気を感じることもさきあります。そのような状況下で、いま「DRAMAかながわ」が出来るのは演劇人の交流と情報の提供ではないかと考えます。「県演連は企画集団であるのか否か」と言う議論は未だにありますが、もし後者であるならば(興行を行わないならば)、「DRAMAかながわ」は演劇資料室運営と並び、外部へ県演連の存在をアピールする数少ない手段のひとつとなる訳です。しかし私たちは「DRAMAかながわ」の編集もひとつの企画と考え...

とまあ、お堅く導入してしまいました。県演連50周年というのがきっかけになったかどうかは分かりませんが、今回編集委員が一新されて新体制となりました。

尤も、新体制といっても、私がここにいるのは、はじめに編集委員になった演劇プロデュース『螺旋階段』代表の緑慎一郎氏に誘われたからであり、現在ほかに劇団やぶさか

の浅水真子氏、劇団よこはま老座の海老名信吾氏という強力なメンバーもいます。個人的には、すでに活動していた劇団に入座したことしかなく、新体制の編集委員会には期待が膨らみ、「劇団の旗揚げとはこういうものなのだろうか?」という感慨に耽っています。

やってみたいことは山ほどあります。導入で書いたことは、実は真剣に考えていることでもあり、また、県演連の紹介のみならず、積極的に外部にも出て行き、演劇博覧会に携わっていたときにできなかったことを実現してみたいのです。きっと他のメンバーも同じ思いをしているし、当然このメンバーだけではないことではなく、興味のある方のためにいつでもドアは開けているつもりです。

かつて役者をやっていたときに、「我々のメッセージを観客に伝え、尚且つ『楽しそうにやってるな、私もその輪の中に入りたい』と思わせるような芝居」を目指しているつもりでしたが、それとまったく同じことを、新体制の「DRAMAかながわ」は狙います。

つまり、「DRAMAかながわ」は演劇なんです。

編集部: 関口素実

### 神奈川県演劇連盟加盟団体の記録(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』● 京浜協同劇団● 劇団蒼い群● 劇団河童座● 劇団かに座
- 劇団川崎演劇塾● 劇団こゆるぎ座● 劇団葡萄座● 劇団麦の会● 劇団やぶさか
- 劇団横綱チュチュ● 劇団よこはま老座● 風雲かぼちゃの馬車● まりこ☆みゆーじあむ
- 横須賀市民劇場プロジェクト● 横浜小劇場● ラゾーナ川崎プラザソル● G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>

DRAMAかながわ[第62号] 発行日:2011年7月1日 発行:神奈川県演劇連盟 編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)